

保育所の自己評価

令和7年度新栄保育園

<評価方法> 理解度・実施度 A(80%～) B(50～80%) C(20～50%) D(0～20%) E(職務担当外)

①	第1章 総則 1 保育所保育に関する基本原則	A	B	C	D	評価点	課題点＋改善策
1	保育所は子どもの幸せのための施設であり、社会や家庭の利益ではなく、子どもの最善の利益を考慮する場であるという事を知っている。	80%	20%	0%	0%	保育所における養護の意義や、養護と教育を一体的に行う必要性への理解が深まってきた。また、保育所は子どもの最善の利益を考慮する場であるという認識も広がっている。 保育者一人ひとりが、子ども自身が人との関係を築き、子ども同士の関係がより発展するような関わりを意識するようになってきた。	子どもが自分の感情や意見を持ち、やりたいことを自ら決められる環境の重要性が十分に評価されていない。そのため、子どもが主体的に環境に関わり、自発的に活動し、多様な経験を積んでいけるよう、環境の構成や保育内容を工夫していく必要がある。
2	保育所は養護と教育を一体的に行い、養護の部分では「生命の保持及び情緒の安定」教育の部分では「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」という5領域で目標が示されている事を知っている。	70%	28%	3%	0%		
3	保育者が主導的に何かをやらせるのではなく、一人ひとりの発達過程や個性を見据え、子どもが自分の感情や意見をもちやりたいことを自分で決め、やりたいことが存分にできる環境を整え保育を行なっている。	43%	43%	14%	0%		
4	自発的な活動への意欲を引き出せるよう、遊具や用具は固定ではなく、その種類や数、配置なども工夫をし同時に保健・衛生的な視点で環境のチェックも行い、動と静の活動も考慮して保育を行なっている。	41%	38%	18%	3%		
5	子ども自身が人との関係をつくっていけるように、子どもたちがいろいろなやり取りをするのを見守り、ときには仲立ちをし子ども同士の関係が発展するように関わり保育を行なっている。	55%	42%	3%	0%		
②	第1章 総則 2 養護に関する基本的事項 3 保育の計画及び評価 4 幼児教育を行う施設として共有すべき事項	A	B	C	D		
6	子どもの気持ちを丁寧に理解し寄り添い、登園した子どもがほっとするような優しく温かい空間を意識して、養護的環境を崩さないように保育者の言葉が指示や禁止にならないよう気を付けて保育を行なっている。	63%	37%	0%	0%	日頃、保育者の子どもへの声掛けや接し方を見ていると、子どもがほっと安心できるような、優しく温かい空間を意識して保育している様子が伺える。さらに、子ども一人ひとりの気持ちに寄り添い、安心感を大切にしながら関係を築こうとする姿勢も感じられる。保育者は、子どもの心の動きを細やかに受け止め、穏やかな言葉や温かなまなざしで信頼関係を育みながら、子どもが自分らしく過ごせるよう支援している。	育ってほしい(10の姿)への理解は深まってきているものの、それを具体的に保育にどう取り入れるかについての評価はまだ十分ではない。今後、園内研修を重ねながら、10の姿を意識した保育の方向性やかかわり方を明確にし、具体的な実践方法を共有しながら、保育者全員で統一した取り組みを進めていくことで、子どもたちの成長をより効果的に支えていきたい。
7	子どもの「やりたい」気持ちを尊重しながら時間的にも空間的にもゆとりのある環境の中で、一人ひとりが自然にリズムをつくっていけるように心掛けて保育を行なっている。	42%	50%	8%	0%		
8	応答的な触れ合いや言葉掛けを行い気持ちを受容し共感しながら信頼関係を築いて、子どもが主体的に活動できるよう見守ったり働きかけをする中で適切な食事や休息が取れるよう保育を行なっている。	61%	33%	6%	0%		
9	全体的な計画や指導計画は、園の目標や目指す子どもの姿、発達過程や主体的な活動、生活リズムなども意識して計画をつくり、それを実行してうまくいっているかどうかの評価をし計画に改善を加えている。	29%	50%	18%	4%		
10	遊びや生活の中で、何かに気付いたり、できるようになったり、試したり、伝え合ったりしながら子どもたちの中にどういう心情、意欲、態度が育っているのかを見極めて支援をし保育を行なっている。	36%	56%	8%	0%		
11	幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)は到達目標でも幼児期の終わりの完成形ではなく、毎日の保育の積み重ねがその姿につながっていくということを意識して保育を行なっている。	49%	38%	11%	3%		
12	子どもの発達を見ながらを「10の姿」をどのように保育に取り入れたらいいのかを知り保育を行なっている。	17%	56%	25%	3%		
③	第2章 保育の内容(前文) 1 乳児保育に関わるねらい及び内容	A	B	C	D		
13	保育における「養護」とは、子どもの生命の保持及び情緒の安定を図るために保育者等が行う援助や関わりであるという事を知っている。	60%	35%	5%	0%	養護や教育の保育内容についての理解が深まり、それに基づいた実践が少しずつ定着してきている。特に、子ども一人ひとりの気持ちに寄り添い、応答的な関わり方を意識した保育を実践できるようになってきた。子どもが安心して過ごせる環境を整えるだけでなく、興味や関心を引き出しながら、自ら考え行動できるような関わりを大切にしている。今後は、さらに保育者間での情報共有を密にし、具体的な場面ごとの対応を検討しながら、より質の高い保育を目指していきたい。	乳児保育の「ねらい」及び「内容」が3つの視点から展開されていることへの理解が十分ではなく、実践において課題が見られる。特に、未満児クラスにはパート職員が多く配置されているが、研修の機会が限られており、保育の質の向上に影響を及ぼしている。今後は、研修に参加できない職員でも学べる場を提供し、日々の保育の中で実践的な知識を深められるよう、動画配信や勉強会の開催など、多様な学習の機会を設けることで、現場の理解度を高めていく。
14	「教育」とは、子どもが健やかに成長し、その活動がより豊かに展開されるための発達の援助であるという事を知っている。	65%	30%	5%	0%		
15	特定の大人との応答的な関わりを通じて情緒的な絆が形成されるといった特徴があることを知り、愛情豊かに、応答的に保育を行なっている。	62%	32%	5%	0%		
16	乳児保育の「ねらい」及び「内容」は身体的発達に関する視点、社会的発達に関する視点、精神的発達に関する視点の3つの視点で展開され示されている事を知っている。	44%	49%	8%	0%		
17	健やかに伸び伸びと育つ、身近な人と気持ちが通じ合う、身近なものに関わり感情が育つの各ねらいと内容を2つは理解して保育を行なっている。	39%	44%	17%	0%		
18	一人ひとりの子どもの生育歴の違いに留意しつつ、欲求を適切に満たし特定の保育士が応答的に関わるように努めている。	60%	26%	14%	0%		
19	保護者との信頼関係を築きながら保育を進めるとともに保護者からの相談に応じ保護者への支援に努めている。	47%	29%	21%	3%		
④	第2章 保育の内容 2 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容	A	B	C	D		
20	つまむ、めくるなどの指先の機能も発達していくので食事、衣服の着脱なども保育士の援助の下で自分で行えるように保育を行なっている。	62%	32%	6%	0%	身の回りのものへの興味や関心が大きく広がり、行動範囲も日々広がっていく中で、子どもたち一人ひとりの発達過程を丁寧に見極めながら保育をする姿が見られる。保育者は、子どもの好奇心や探求心を大切にしながら、安心して挑戦できる環境を整え、適切な言葉掛けや援助を行うことで、さらに興味を深め、自ら学び取る力を育んでいる。今後は、より豊かな体験を提供しながら、子どもの発達に寄り添う保育を充実させていきたい。	5領域のねらいや内容の理解が不十分で、保育の実践に課題が見られる。そのため、クラス会議や勉強会を通じて情報共有を進め、5領域を意識した保育の実践を深めていく。また、子どもの情緒を安定させる関わりや環境構成が不十分で、主体的な遊びを見逃してしまう場面がある。今後は、子どもとじっくり向き合いながら思いや興味・関心を理解し、それを踏まえた保育を展開できるよう、研修を通じて学び合う機会を充実させていく。
21	保育者の身体的な関わりを伴う養護的な場面が多いが、子どもが経験していることに注目すると教育的な側面が見えてくるので、3歳以上児の生活へと緩やかにつながっている事を知っている。	51%	35%	11%	3%		
22	健康、人間関係、環境、言葉、表現の各ねらいは2つ、内容は3つは理解し保育を行なっている。	40%	40%	17%	3%		
23	探索活動が十分できるように事故防止に努めながら活動しやすい環境を整え、全身を使う遊びなど様々な遊びを取り入れて保育を行なっている。	47%	38%	12%	3%		
24	自我が形成され、子どもが自分の感情や気持ちに気付くようになる重要な時期であることに鑑み情緒の安定を図りながら、子どもの自発的な活動を尊重するとともに促す保育を行なっている。	38%	53%	6%	3%		

⑤	第2章 保育の内容 3 3歳以上児の保育に関するねらい及び内容 4 保育の実施に関して留意すべき事項	A	B	C	D		
25	仲間と遊び、仲間の中の一人という自覚が生じ、集団的な遊びや協同的な活動も見られるようになるので、発達の特徴を踏まえて、個の集団としての活動の充実が図られるように保育を行なっている。	45%	36%	15%	3%	発達の特徴を踏まえながら、個としての成長と集団としての活動の充実が少しずつ図られるようになってきた。保育者は、一人ひとりの発達段階に応じた関わりを大切にしながら、集団の中での経験を通じて、子ども同士の交流や協力の機会を積極的に提供している。特に、子どもが自ら考え行動できる環境を整え、主体的な活動を促すことで、自信を育みながら人との関係性を深めることができるよう努めている。今後は、より多様な活動を取り入れながら、子ども同士のつながりを育み、一人ひとりが安心して参加できる集団づくりを目指していく。	この項目については、全体的に評価が低く、十分な理解が得られていない。そこで、全体会議の際に1時間を設け、まずは保育指針の読み合わせから始めていく。さらに、具体的な実践例を共有しながら意見交換を行い、指針の内容を保育現場でどのように活かせるかを考える機会を増やす。継続的な学びの場を確保しながら、保育者同士が協力し合い、より質の高い保育を目指していく。
26	心身の健康に関する領域、人との関わりに関する領域、身近な環境との関わりに関する領域、言葉の獲得に関する領域、感性と表現に関する領域、としてまとめ示されている事を知っている。	32%	59%	5%	3%		
27	健康、人間関係、環境、言葉、表現の各ねらいは2つ、内容は3つは理解し保育を行なっている。	38%	44%	15%	3%		
28	子どもの発達や成長の援助をねらいとした活動の時間については、意識的に保育の計画等において位置付けて実施することが重要である事を知っている。	46%	34%	17%	3%		
29	各領域に示すねらいの趣旨に基づき具体的な内容を工夫し加えてもいいがその場合、それが第1章の1に示す保育所保育に関する基本原則を逸脱しないよう慎重に配慮する必要がある事を知っている。	32%	45%	18%	5%		
30	子どもの国籍や文化の違いを認め互いに尊重する心を育てるようにしたり、又、子どもの性差や個人差にも留意しつつ性別などによる固定的な意識を植え付けることがないように保育を行なっている。	60%	29%	9%	3%		
31	小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通じて創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うように保育を行なっている。	42%	33%	21%	3%		
32	子どもの生活の連続性を踏まえ家庭及び地域社会と連携して保育が展開されるように配慮したり、豊かな生活体験をはじめ保育内容の充実が図られるように配慮している。	52%	29%	16%	3%		
⑥	第3章 健康及び安全 1 子どもの健康支援 2 食育の推進	A	B	C	D		
33	顔色や機嫌、表情や動きなどを丁寧に見たり日頃の様子をしっかり把握して、病気や異変のサインなどをいち早くキャッチできるように保育中は子どもの様子をよく見ている。	65%	35%	0%	0%	全体的に平均以上の割合が多く見られた。病気や異変のサインをいち早くキャッチできるよう、日頃から子どもの様子を丁寧に把握していることが高く評価されている。また、穏やかな雰囲気をつくる言葉かけをしながら、子どもが食事を楽しめるよう工夫を凝らしている様子がうかがえる。	食に関わる保育環境をつくるために、「今日のお昼は何かな？」や「昨日収穫したきゅうりを給食の先生が料理してくれるよ」など、子どもが食事に関心を持てるような言葉かけを積極的に行う。日々の食材や調理の過程について話題にしながら、食べることへの興味を促し、食の楽しさを感じられるような関わりを大切にしてい
34	食物アレルギーによる事故を防ぐには、担任、担当の保育者だけでなく調理スタッフまで含めた全職員での対応をし保護者とも連携をとり家庭での様子やかかりつけ医の診断内容など把握している。	64%	24%	9%	3%		
35	保育者や友だちと一緒に同じものを食べる時間を楽しいと感じられる経験や野菜をつくったり、その野菜を収穫する体験を通して食べ物への興味を高め、感謝して食べることを学べるように保育を行なっている。	61%	24%	9%	6%		
36	食事を楽しむために発達に応じた言葉掛けを行い、和やかな雰囲気づくっている。	82%	15%	3%	0%		
⑦	第3章 健康及び安全 3 環境及び衛生管理並びに安全管理 4 災害への備え	A	B	C	D		
37	園の感染症対策は拡大を防ぐことが第一の目標で、園で流行しやすい感染症の特徴を知って、その発症のサインを見逃さないように心掛け、又、感染した場合は登園停止期間など園の規定を保護者に伝えている。	70%	18%	9%	3%	全体的に普通以上の割合が多く、安定した状況が続いている。特に、小さなヒヤリも見逃さず、速やかに情報を伝達することで、より早く広く共有できるようにしてきた。これにより、保育者間で危険予測の意識が高まり、未然に防げる場面が増えている。今後は、さらに情報共有の仕組みを整え、具体的な事例を分析しながら安全対策を強化し、より安心できる環境づくりを進めていく。	定期的な安全点検を実施するだけでなく、全体研修の場で報告を行い、共通理解の深化や体制づくりを進めていく。研修では、安全点検の結果を具体的に共有し、改善点や課題を明確にすることで、より効果的な取り組みにつなげる。また、事例をもとに対応方法を検討し、保育者一人ひとりが危険を予測し未然に防ぐ意識を持てるよう、継続的な学びの機会を確保していく。
38	保育室内の環境は、常に一定の室温や湿度を保ち、換気や採光などにも注意を払っている。又、エアコン、加湿器、空気清浄機などのフィルター掃除も定期的に行なっている。	65%	30%	3%	3%		
39	事故防止対策は、子どもの目線や好奇心などの発達を踏まえ、園庭の遊具や危険箇所は日常的にチェックしたり、又、不審者の侵入を防止する措置がとられマニュアルがあり訓練を行なっている。	66%	26%	6%	3%		
40	災害に備えた環境づくりとして、物が落下しないよう棚の上など高い場所には物を置かないようにしたり、備蓄品は当番になった職員が定期的に見直しを行なっている。	63%	31%	6%	0%		
41	避難訓練計画等に関するマニュアルが作成され、定期的に様々な避難訓練を実施し、緊急時の対応の具体的な内容及び手順、職員の役割分担がされている。	69%	26%	0%	6%		
⑧	第4章 子育て支援	A	B	C	D		
42	登降園時の会話や連絡帳などを通して保護者が頑張っている姿に寄り添い、励ましたり子どもの育ちを伝え保護者の子育てに対する喜びや充実感を感じられるような支援を行なっている。	52%	45%	3%	0%	保護者への伝え方や必要性を慎重に判断し、職員間で話し合い、個別面談を行っている。保護者の不安や疑問に寄り添い、子どもの成長や発達について伝えている。	地域に開かれた保育園を目指すため、新栄保育園の保育内容を紙面化し、取り組みを広く知ってもらい、地域とのつながりを深めることを目指す。
43	子どもに障害や発達上の課題がある場合は、なるべく早い段階で専門機関につなぎ客観的な判断を仰ぐことができるよう、園内で会議などを開いている。	52%	41%	7%	0%		
⑨	第5章 職員の資質向上 1 職員の資質向上に関する基本的事項 3 職員の研修等	A	B	C	D		
44	保育所全体としての保育の質の向上を図っていくために、職場内での研修の充実が図られ、又、必要に応じた外部研修への参加機会が確保され、参加している。	64%	29%	4%	4%	職場内研修の充実により、保育者の専門性が高まり、子どもを中心とした保育を実践できるようになってきた。より質の高い保育環境を整える取り組みが進んでいる。	今後も保育の振り返りの時間を設け、職員が資質を向上させるために必要な知識や技能を身につけていく。振り返りを通じて保育の質を高めていく。
45	子どもを一人の人間として尊重するという姿勢、そして倫理観を持ち丁寧に、受容的で応答的な保育を行い、常に子どもを主人公として捉え気持ちをどう満たしてあげられるのか考えながら保育を行なっている。	60%	31%	6%	3%		
⑩	新栄保育園の基本姿勢	A	B	C	D		
46	園の保育理念や保育目標を理解している。	53%	40%	5%	3%	園の保育理念や保育目標、自由保育の在り方についての理解が深まり、保育実践にも良い影響を与えている。特に、担当制においては、同じ児童に対して同じ職員が継続して関わることで、子どもとの信頼関係がより深まり、一人ひとりの発達や個性に応じた丁寧な関わりが実現できている。今後は、さらに職員間の情報共有を密にし、個々の子どもへの理解を深めながら、より質の高い保育の提供を目指していく。	年月案の計画に目を通し、前月末の子どもの姿と照らし合わせながら計画を立て、それを週案へとつなげて保育を進めていく。この流れを継続することで、子どもの成長や発達の変化を丁寧に捉え、より個々に適した保育を実践することができる。また、職員間で計画の意図を共有し、柔軟に調整を加えながら、子どもの興味や関心に寄り添った活動を展開し、日々の保育の質を高めていく。
47	就業規則などの諸規則を理解し、守り、業務遂行にあたって正確・迅速、かつ、こまめに報告・連絡・相談・確認を実践している。	68%	23%	10%	0%		
48	子ども等の個人情報適切に取り扱うとともに、保護者の苦情などに対し、その解決を図るよう努めている。	74%	18%	9%	0%		
49	子どもたちが自ら選択し、自由に遊びを選べる保育に取り組んでいるか。(自由保育：全児童)	63%	26%	6%	6%		
50	食事、排泄、睡眠については、できるだけ同じ児童に対して同じ職員が担当するように配慮しているか。(育児担当制：未満児)	69%	25%	6%	0%		